

第3章 益子町の歴史文化の特性と保存・活用の課題

1. 益子町の歴史文化

1-1 自然の特性

益子町の自然の特性として第一に挙げられるのは、自然度の高い植生の分布である。もとより雨巻山や高館山は、植物分類・地理学上、暖温帯植物の宝庫であることが知られており、牧野富太郎や本田正次、関本平八等の著名な植物学者が益子を訪れ、研究の対象としてきた。西明寺境内の椎林叢（県指定天然記念物）やリンボク群生地（町指定天然記念物）は、益子が暖温帯植物の分布地であることを表すものである。リンボク群生地は栃木県では、高館山のみであり、日本の北限に近い貴重な例となっている。

一方で、高館山や雨巻山の山頂部では、冷温帯植物であるブナが存在する。暖温帯植物のスタジイ等と冷温帯植物のブナが混在する植生は全国的にも非常に珍しく、益子の自然の最大の特性となっている。

貴重な自然植生と共に、益子の自然を考える上で欠かせないのが、長く暮らしの中に息づいてきた里山（二次林）である。益子の里山はコナラやアカマツを主体としており、燃料である薪や炭、堆肥となる落葉の供給地であった。特にアカマツは発熱量が大きく焼き物の焼成に適しているため、益子焼の焼成燃料として利用された。また、益子の大地を形成する地層の中で、町の北部に分布する新生代新第三紀の地層から芦沼石が建材や釉薬として産出され、新生代第四紀更新世中頃の砂や粘土を含む礫層中の粘土から益子焼の陶土が産出された。

これらは益子の暮らしや産業と深く結び付いており、益子町にとって貴重な資産であると言える。



写真 3-1 西明寺境内の椎林叢



写真 3-2 高館山山頂のブナ



写真 3-3 粘土の原土



写真 3-4 芦沼石の採石場跡

1-2 歴史の特性

益子の歴史の中で特徴的な時代として、古墳というモニュメントを通して、古代益子の地に現れた豪族たちの足跡を見ることができる古墳時代、下野薬師寺や下野国府等に供給する瓦の生産を行い、芳賀山観音寺（後の西明寺）が創建され、紀氏が本格的に益子の地に進出して後の益子氏となった平安時代、宇都宮氏および宇都宮氏の有力家臣となった益子氏により多くの寺社が創建・整備され、城館が築かれて文化的にも経済的にも隆盛を迎えた鎌倉時代から室町時代、大塚啓三郎により開始された益子焼が産業として発展した幕末～明治時代、濱田庄司の移住をきっかけに、日用雑器であった益子焼が民芸品としての地位を確立した昭和時代を挙げることができる。

中でも、鎌倉時代から室町時代の中世の文化財や遺跡は歴史的な価値の高いものが多い。益子町の指定文化財のうち、国指定の文化財となっているのはすべて、室町時代の寺社の建造物である。これらの寺社が所蔵している仏像でも地蔵院所蔵の木造阿弥陀三尊像の観音菩薩座像と勢至菩薩立像が、鎌倉時代の著名な仏師である快慶作の可能性が高いことが指摘されるなど、今後の調査により、その価値が高まると予想されるものが存在する。また、円通寺に設けられた学問所である大沢文庫が所蔵した月形函文書や、地蔵院所蔵の絹本著色両界曼荼羅図など、書跡や絵画、長谷寺の羽石家五輪塔などの考古資料等の文化財も多く存在する。中世の館跡も町の各所に存在し、西明寺城は南北朝時代に、南朝の関東六城の最北端の拠点として重要な役割を果たしたことが史料に記されている。

このように、豊富な文化財が残されている益子の中世文化財群のなかでも、宇都宮朝綱が亡くなった息子業綱を弔うために創建した尾羽寺、地蔵院、宇都宮家の墓所など、上大羽地区に残る宇都宮氏関連の文化財は、宇都宮氏がこの地を笠間方面へ進出するための前線地として位置づけたとされることから、益子のみならず、関東の中世の歴史を考える上でも重要である。



観音菩薩座像 阿弥陀如来立像 勢至菩薩立像

写真 3-5 木造阿弥陀三尊像（鎌倉）



写真 3-6 羽石家五輪塔

宇都宮氏は中世の名族で、鎌倉幕府や室町幕府の中でも重要な地位にあった。本拠地である宇都宮市では、近世の城下町の整備や近代以降の都市化により、宇都宮氏の遺跡や文化財の多くが消滅しているため、上大羽の地が宇都宮氏の歴史文化を探り偲ぶことができる最適地となっている。

特に、宇都宮氏歴代の当主が祀られた宇都宮家の墓所は、宇都宮氏にとって聖地であったと考えられる。宇都宮家の墓所周辺の遺構配置は、墓所とゆかりの寺院跡や多宝塔跡が南北に並ぶ状況が、足利氏の墓所が所在する足利市樺崎寺跡一带と類似しており、それから類推すると、墓所や地蔵院の前面（西側）に浄土庭園が存在する可能性が高いことが指摘されている。

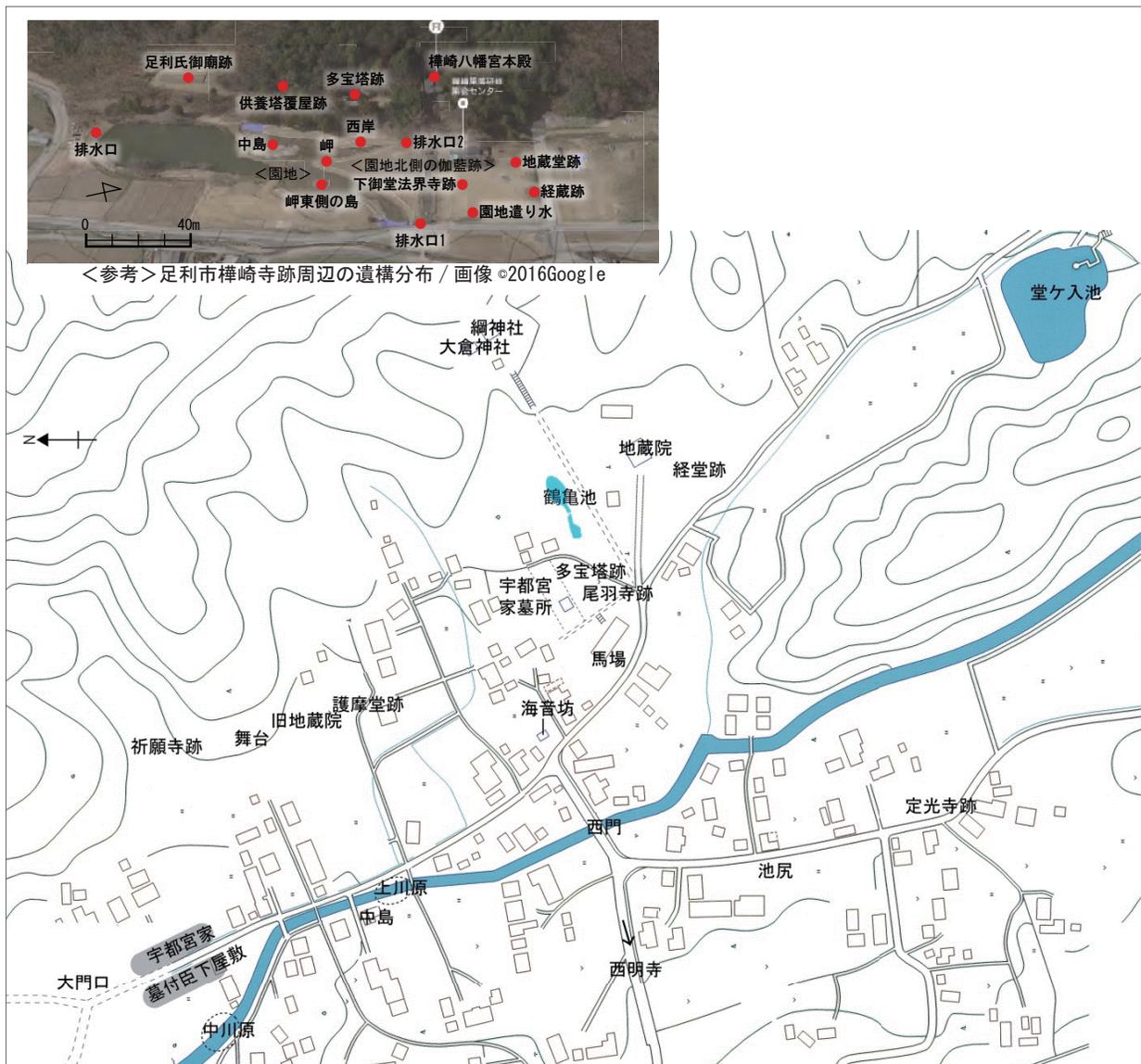


図 3-1 上大羽、宇都宮家の墓所、地藏院周辺の遺構分布

1-3 暮らしと文化の特性

(1) 益子焼のはじまりと工芸の発展

益子の基幹産業の一つである益子焼は、益子の産業のみならず文化を語る上でも欠かすことができない存在である。益子焼は大塚啓三郎が嘉永6年（1853）に根古屋に窯を築いたのが始まりとされている。大塚啓三郎は茂木の福手村に生まれ、常陸国笠間村の鳳台院慈眼寺に住み込んでいた時、住職が箱田の久野窯に出資していた関係で、窯場を訪れるうちに焼き物の技術を習得した。その後、益子村の大塚平兵衛の婿養子となり、益子村から実家の福手村に帰る途中、大津沢で良質な陶土を発見したのをきっかけに、農閑期に焼き物を始めるようになった。

初期の益子焼の発展に大きな貢献をしたのは、安政2年（1855）に黒羽藩から郷奉行として赴任した三田称平であった。称平は着任後、領内検分の折、益子の土質が焼き物に適していることを発見し、益子焼を藩の物産とするために様々な保護奨励策を実施した。常陸国の宍戸焼や笠間焼の窯元で技術を身につけた陶工を招いて生産の拡大と安定を図った。また、大阪勤務時代に見かけた直接火にあてて酒を温める器を参考に称平徳利を考案し、大塚啓三郎に焼成させた。これは当時流行の酒器となった。安政4年（1857）には大塚啓三郎、大塚英治、菊池清蔵等の6窯に対して奨励覚書を交付し、財政的な援助を行った。これらの窯元達が覚書の仕法に従って各々焼成に勉励した結果、益子焼は声価をあげて江戸へも市販されるようになり、藩の財政を潤す物産になった。

明治初年には益子焼の窯元は20数軒に増加し、益子焼の生産に適した条件を供えた道祖土から城内にかけての丘陵地に多くの窯が築かれた。明治時代から大正時代にかけて、益子焼の生産は好不況等の社会的な要因を受けて増減した。そうした中でも、明治36年（1903）に陶工の技術の養成のために、益子焼発祥の地である根古屋の大塚忠治（啓三郎の息子）窯場の一部に益子陶器伝習所が開所する等、焼き物の品質向上に努め、焼き物の町益子の地盤を固めていった。

すり鉢、片口等の日用品の生産が主体であった益子焼が、民芸品、工芸品としての地位を獲得し、全国にその名が知られるようなきっかけとなったのが、濱田庄司の益子への移住であった。

濱田庄司は大正9年（1920）に益子を訪れて以来、益子焼に興味をひかれた。その後、バーナード・リーチとともにイギリスに渡り、コーンウォール州セント・アイヴスに東洋式の登り窯を築窯して作陶した後、

帰国して大正13年（1924）に益子に移住して作陶活動に入った。濱田が益子を作陶の地を選んだ理由は、渡英中訪れたディッチリングでの染織家エセル・メーレやエリック・ギルなどとの交流から、田園の風土に根を下ろし創作活動する芸術家や工芸家の暮らしに影響を受けたことが指摘されている。益子が比較的東京に近く、ロンドンとディッチリングの距離に類似していることも考慮されたと考えられる。濱田がバーナード・リーチと窯を築いたセント・アイヴスはロンドンから遠く、作品販売の面では苦労があった。また、何より益子で産出される粘土が、砂目の多いざっくりした土を好んで使う濱田の作風に合っていたことが大きいと考えられる。

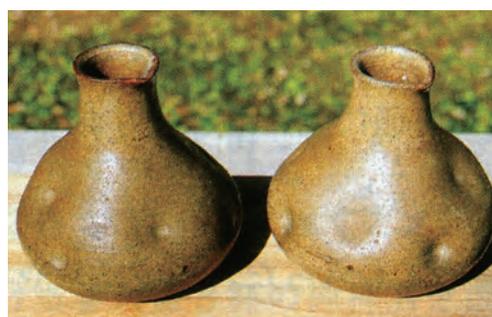


写真 3-7 称平徳利（個人所蔵）

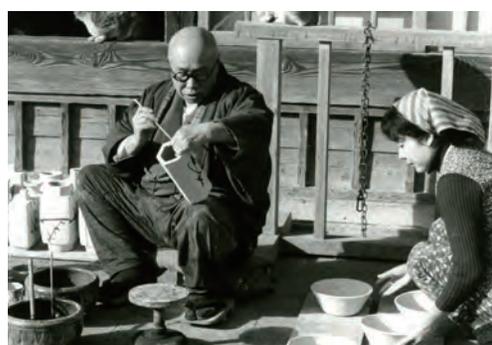


写真 3-8 濱田庄司



写真 3-9 濱田庄司作品

写真 3-10 島岡達三作品

濱田の移住は、益子に徐々に変化をもたらしていった。益子の陶土と釉薬を使いながらも、従来とは異質のものを作る濱田に、当初、窯元たちは拒否反応を示した。しかし、好奇心の強い佐久間藤太郎など若い陶工たちは濱田の説く「民藝」に耳を傾け、民藝新作運動などに取組み始めた。民藝運動に熱心に取り組んだ濱田のもとへは、同じくこの運動に取り組む柳宗悦、バーナード・リーチ、芹沢銈介、棟方志功等の文化人や芸術家が訪れ、益子に足跡を残した。濱田により、皆川マスの絵付けが評価され、また、濱田の紹介で笹島喜平が棟方志功に師事し、版画家笹島喜平として独自の作風を開発していった。益子は国内に限らず、海外へも及ぶ民藝運動の交流（ネットワーク）の中に位置づけられることとなった。そのネットワークは今日、益子国際工芸交流館でのアーティストの国際交流や、セント・アイヴスとの文化交流に活かされている。

益子の風土から生まれるべくして生まれたような濱田の陶芸は高い評価を受け、昭和30年（1955）、「重要無形文化財技術指定保持者」（人間国宝）に指定される。濱田の知名度と共に、益子焼の認知度も高まった。また、濱田を慕って門下生となった村田元、島岡達三や、作陶の地として益子を選び、濱田庄司に称賛されたことから注目を集めるようになった加守田章二など、様々な陶芸家の作品が益子の地で生まれることになった。こうして、益子焼の伝統に基づきながら、自由な作家性を表現する益子独自のスタイルが確立されていった。

また、民藝運動の一環として、濱田は益子に手仕事村を構想し、町内の木工、鍛冶、藍染などに携わる若手職人たちを集めその理念を伝えた。彼らの取組みは昭和15年（1940）の雑誌『民藝』で紹介されている。戦中から戦後、激動の時代背景の中で具体化はなされなかったが、家具屋の広瀬氏に濱田が発注した階段箆笥は、日本民藝館西館（旧柳宗悦邸）、河井寛次郎記念館、益子参考館などに残り、鍛冶屋の熊代氏による濱田意匠のランプシェードは日本民藝館の玄関ホールに飾られている。日下田家により代々受け継がれた紺屋は、江戸創業時の藍甕を守り、染・織の新たな可能性に取り組んでいる。陶芸の他にこうした工芸の伝統技術が継承されているのも、益子の大きな特徴である。

(2) 祭りと民俗芸能

益子には各所に土地の人々に受け継がれてきた祭礼や民俗芸能が存在する。代表的なものに、各地の神社で行われる祭礼がある。旧黒羽藩の領地であった内町・新町・田町・道祖土・城内で行われる八坂神社の祭礼（通称益子祇園祭）では、御神酒頂戴式という当番町引継ぎの儀式が行われている。1年365日にちなんで3升6合5勺入りの大杯に注がれた酒を飲み干し、五穀豊穰、無病息災、家内安全を祈願する儀式で、かつて黒羽藩主大関公より御神酒を賜った故事によると言われている。この祭りの付祭り引き回される彫刻屋台は、江戸時代後期の文化・文政頃に宇都宮でつくられたもので、益子の三町内（新町、内町、田町）が明治15年（1882）頃に購入して、現在にいたっている。宇都宮の屋台は昭和20年（1945）の空襲でほとんどが失われたため、当時の文化や彫刻技術を知る上で貴重な文化財となっている。祇園祭の祭礼は山本地区でも行われており、原には宇都宮で製作された彫刻屋台がある。また、同地区の松本では、他の彫刻屋台と異なる京都で製作された県内でも珍しい屋台が存在する。この他にも山本地区では鹿島神社・八幡神社の祭礼も行われている。その他の地域でも、七井の八雲神社祭礼（通称ギョンサマ）、日枝神社祭礼、長堤の八幡宮例大祭（通称大日さま）、東田井の鹿島神社内八坂神社夏祭り、塙の春日神社例大祭、下大羽の高麗神社祭礼、大平の熊野神社祭礼など、各地で祭りが行われている。七井地区の下町・後町では、昭和35年（1960）頃に途絶えた夏祭りの山車を平成26年（2014）に復活した。龍神さま（雨乞い）、風祭り（台風除け祈願）、どんどん焼などの季節の行事にちなんだ祭りも各所で伝えられている。



写真 3-11 八坂神社御神酒頂戴式



写真 3-12 内町彫刻屋台



写真 3-13 新町彫刻屋台



写真 3-14 田町彫刻屋台



写真 3-15 松木屋台



写真 3-16 原彫刻屋台

民俗芸能では、芦沼獅子舞が町指定の無形民俗文化財になっている。通称芦沼のささらといわれ、1月の奉経塔祭、8月の観音堂一万燈祭、12月の地藏尊縁日で演じられる。一時、途絶えていたが、昭和47年(1972)に復活した。同じく、山本地区の松本では歌舞伎舞台を復元したことをきっかけに、昭和26年(1951)以来途絶えていた農村歌舞伎を平成17年(2005)に従来どおり外部から演者を招いて上演し復活させた。4年に一度、松本三ノ宮神社境内で開催される。この舞台では、山本に伝わる伝統芸能である妙伝寺雅楽や、山本太々神楽も披露される。太々神楽は大羽の綱神社等にも伝えられている。

祭礼と密接に関わる民俗芸能は、各地区の人々の交流の核となってきたものであり、多彩な祭りや芸能が継承されてきたことは、益子の暮らしと文化の大きな特性である。こうした伝統文化を大切にする風土を背景に、あじさい祭りや土祭等の新しく創造された祭りも行われている。



写真 3-17 芦沼獅子舞



写真 3-18 山本太々神楽



写真 3-19 長堤太々神楽



写真 3-20 綱神社太々神楽



写真 3-21 妙伝寺の雅楽

(3) 多彩な人物群と芸術文化

益子は地元出身者と移住者の芸術家やクリエイターが多く存在する地でもある。

益子出身で江戸時代後期に活躍した画家の小泉斐は、鮎の絵で著名であるが、富士登山の折に描いた「富嶽写真」は、富岡鉄斎の富士図製作や、葛飾北斎の富嶽三十六景にも影響を与えたと言われる。濱田庄司の移住以後、陶芸の里としての益子の知名度が高まったことや、濱田による民藝運動のネットワークの中で、様々な文化人や芸術家が訪れたこともあり、益子に醸成された文化的風土は、笹島喜平（版画家）や古郷秀一（彫刻家）のような地元出身の芸術家を生むと共に、他所から芸術家やクリエイターが益子へ移り住むようになった。

ハンガリー出身の彫刻家ワグナー・ナンドールは、スウェーデンから移住し、昭和45年（1970）に益子にアトリエを建設して、そこで様々な作品を制作した。現在、そのアトリエはワグナー・ナンドール アートギャラリーとなっており、益子町の文化施設の一つとなっている。また、世界的ファッションデザイナーの熊谷登喜男のパートナーとして、TOKIO KUMAGAI ブランドのプロデュースを手がけたクリエイターの馬場浩史は、「衣食住のクリエイティブな自給自足」を実施できる場として益子へ移住し、平成10年（1998）にカフェ・ギャラリー「スターネット」を開設、益子へ多くのカフェがつけられるさきがけとなった。また土祭を企画し、総合プロデューサーもつとめた。

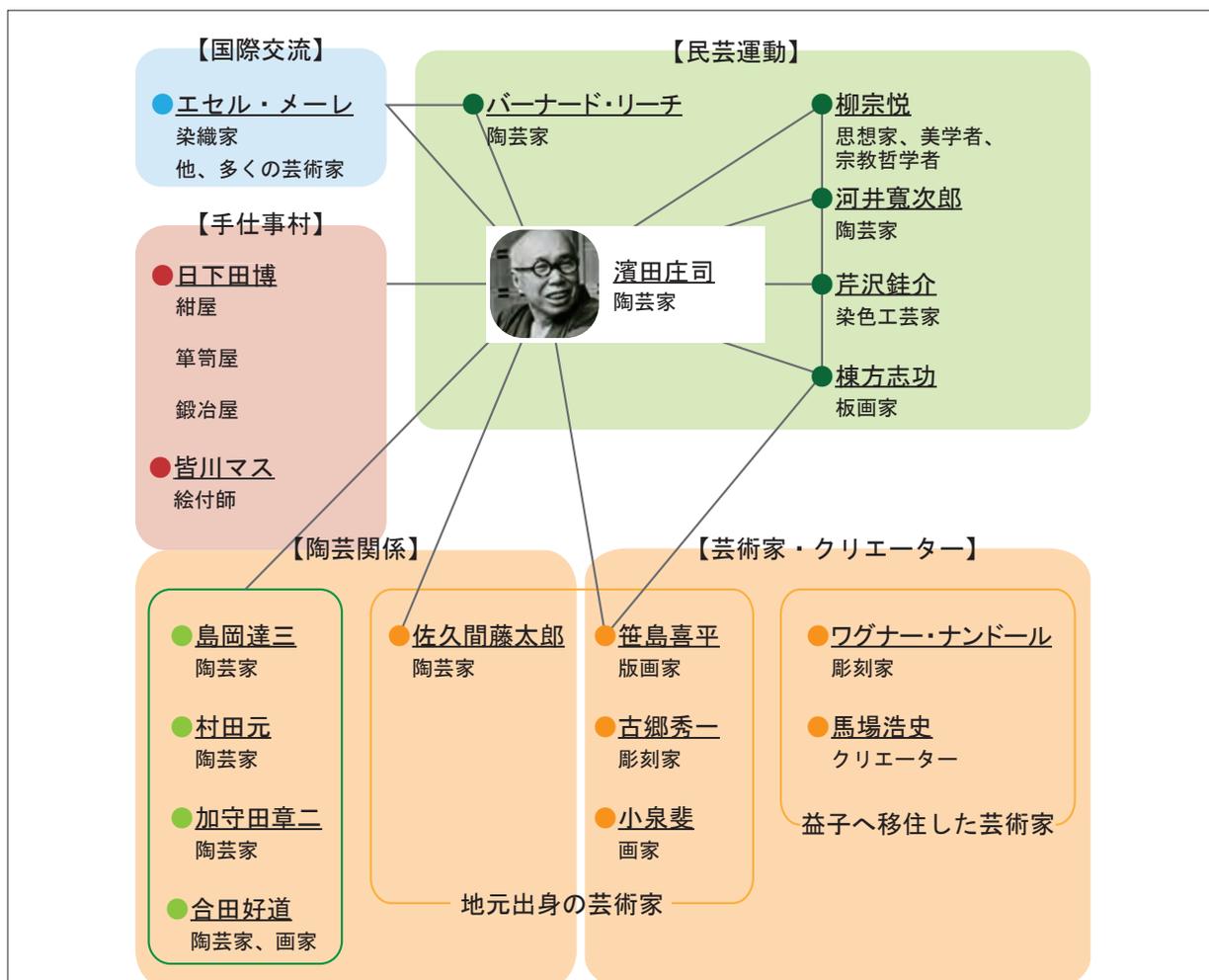


図 3-2 人物相関図

1-4 益子町の歴史文化特性のまとめ

(1) 歴史の足跡を伝える豊富な文化財

益子の歴史の中で特徴的な時代として、県内の古代史を語る上で貴重な古墳がつくられた古墳時代、大規模な古窯址群が残り、紀氏が本格的に益子の地に進出してきた平安時代、宇都宮氏および宇都宮氏の有力家臣となった益子氏により経済的にも文化的にも隆盛を迎えた鎌倉時代から室町時代、大塚啓三郎により開始された益子焼が産業として発展した幕末～明治時代、濱田庄司の移住をきっかけに、日用雑器であった益子焼が民芸品としての地位を確立した昭和時代を挙げることができる。

中でも、鎌倉時代から室町時代の中世の文化財や遺跡は歴史的な価値の高いものが多い。特に、上大羽一帯に残されている遺跡や文化財は、益子のみならず、関東の中世の歴史を考える上でも重要である。宇都宮家の墓所周辺の遺構配置は、墓所とゆかりの寺院跡や多宝塔跡が横（南北）に並ぶ状況が足利市の樺崎寺跡と類似しており、それから類推すると、墓所や地蔵院の前面（西側）に浄土庭園が存在する可能性が高い。

(2) 工芸・芸術文化の遺産

昭和30年代までは、すり鉢や片口等の日用品の生産が主体であった益子焼が、民芸品、工芸品としての地位を獲得し、全国にその名が知られるようなきっかけとなったのは、濱田庄司の移住である。

濱田の移住は、益子焼を日用品から民藝陶器へと変化させ、益子を全国、さらにはバーナード・リーチを通して海外へも及ぶ民藝運動の交流（ネットワーク）の中に位置づけるきっかけとなった。また、民藝運動に取り組む柳宗悦、バーナード・リーチ、芹沢銈介、棟方志功等の文化人や芸術家が益子を訪れ滞在したことにより、多くの財産が益子に残された。

濱田に続いて村田元、加守田章二、島岡達三等の才能ある陶芸家が益子に集まり、益子焼の伝統に基づきながら、自由な作家性を表現する益子独自のスタイルが確立されていった。また、江戸創業時の藍甕を守りながら、染・織の新たな可能性に取り組む日下田家は、濱田の手仕事村の理念を伝えている。陶芸の他にこうした工芸の伝統技術が継承されているのも、益子の大きな特徴である。

濱田による民藝運動のネットワークの中で、益子に醸成された文化的風土は、笹島喜平や古郷秀一のような地元出身の芸術家を生むと共に、ワグナー・ナンドール等の芸術家やクリエイターが他所から益子へ移り住む素地を作ったといえる。

これらの芸術家やクリエイターの足跡は、益子の歴史文化遺産の一つとなっている。

(3) 伝統と交流の要としての祭りや民俗芸能

益子には各所に土地の人々に受け継がれてきた祭礼や民俗芸能が存在する。これらの中には、一度途絶えながらも復活したもの、現代に創設されたものもある。

益子祇園祭や各地域に保存・活用されている彫刻屋台等は、貴重な文化財となっている。

龍神さま（雨乞い）、風祭り（台風除け祈願）、どんどん焼などの季節の行事にちなんだ祭りも各所で伝えられている。

芦沼獅子舞や松本歌舞伎舞台、妙伝寺雅楽、山本鹿島神社や綱神社の太々神楽等、民俗芸能も多彩である。

こうした伝統文化を大切にする風土を背景に、あじさい祭りや土祭等の新しく創造された祭りも行われている。

(4) 特徴的な植生と、暮らしと結びついた自然系文化遺産

益子は暖温帯の植物の宝庫であり、スダジイ、リンボク等が自生している。高館山や雨巻山の山頂部では、これら暖温帯植物に混じって冷温帯植物であるブナが自生している。暖温帯、冷温帯双方の植物が混在することは全国的にも珍しい。

コナラやアカマツを主体とした里山および芦沼石や益子焼の陶土を産出する益子の大地（地層）は、他と比べて、特段に特徴的なものではないが、益子の暮らしや産業と深く結び付いた貴重な資産である。こうした人と自然との係りによって成立した資産を自然系文化遺産とする。

益子の歴史文化の基盤を成すものとして、土と里山をあげることができる。焼き物に適した陶土を生み出す土は、益子の暮らしの糧となった農産物を育み、また、焼き物の釉薬にもなる芦沼石やマンガンなどの資源も産出している。

里山が生み出す木材を利用した薪や炭は、江戸時代には益子を代表する物産として江戸に運ばれ、昭和30年代まで燃料として人々の生活を支えた。また、落ち葉は堆肥となって益子の土地を肥よくにし、森は保水や水の浄化の役割も担っていた。

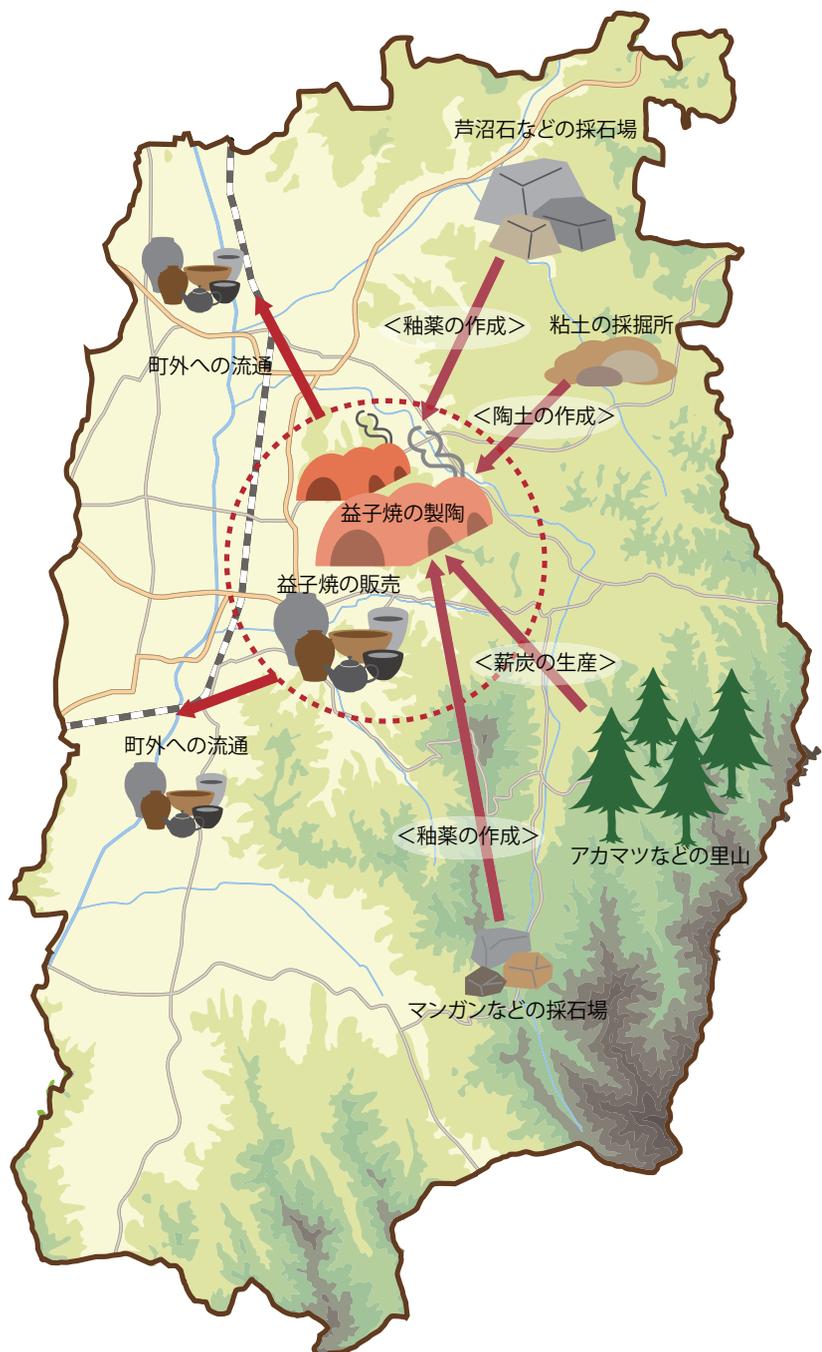


図 3-3 益子の自然と益子焼の関係図

2. 益子町の歴史文化遺産

2-1 文化財および歴史文化に関わる調査

(1) これまでの調査履歴

益子町史編纂事業を昭和55年（1980）から平成3年（1991）に町村合併30周年の記念事業として実施し、益子町史編纂委員会を組織し約10年をかけて編纂した。これに伴い、遺跡分布調査、西明寺測量調査、近世文書・近代文書の悉皆調査と所在目録・マイクロフィルムの作成、窯元に関する統計調査、車堂遺跡、山居台遺跡、原東窯跡、近代窯跡などの発掘調査を行った。これらの調査は栃木県埋蔵文化財センターや大学と連携して実施した。

表3-1 発掘調査

発掘年	遺跡	時代	出土物	備考
1983年	車堂遺跡	弥生時代後期	住居跡3、二軒屋式土器・十王台式土器、紡錘車、凹石	町史編さん事業
1954年	荒久台古墳群 (天王塚古墳)	6世紀末～7世紀前半	円筒埴輪・形象埴輪、装身具、武器、武具、馬具、鏡、太刀	早稲田大学による
1985年	山守塚古墳	古墳時代後期 6世紀後半～7世紀代		記録保存のための調査

表3-2 開発事業に伴う発掘調査

発掘年	遺跡	時代	出土物	備考
1973年	向北原遺跡	古墳時代前期	堅穴住居跡15、方形周溝墓8（35m×36m大型周溝墓） ※古墳時代前期の方形周溝墓は少数	ゴルフ場造成
1975年	長堤遺跡	弥生時代	住居跡4、二軒屋式土器・十王台式土器	県道新設工事
1975年	星の宮ケカチ遺跡	平安時代前期	掘立柱建物8、堅穴住居24、佐波理の匙外遺物多数	益子高校の校庭敷地造成工事
1978年	大郷戸南遺跡	縄文時代	楕円形土坑数基	圃場整備
1979年	星の宮A遺跡	旧石器時代	削器、細石刃、礫器、石核	道路拡張工事
1980年	向北原南遺跡	8、9世紀代	住居跡、土師器、須恵器多数	県立益子養護学校造成工事
1981年	埴遺跡	旧石器時代	尖頭器、ナイフ形石器、石錐、石核・薄片	道路拡張工事
1982年	新田山古墳群	古墳時代	円筒埴輪、太刀（直刀）	宅地造成工事
1985年	向北原古墳群	古墳時代	古墳時代前期15件、古墳時代後期1件、方形周溝墓8基、円筒埴輪、土師器坏・甕	ゴルフ場造成
1989年	御城山遺跡	戦国時代	住居跡、溝、土師器・須恵器遺物多数	陶芸メッセ建設工事
1999年	御霊前遺跡	縄文時代	住居跡、土坑、遺物多数	県営広域農道線建設
2012年	高館城（西明寺城）跡遺跡	戦国時代	溝、遺物少数	地上デジタル中継局建設
2015年	高館城（西明寺城）跡遺跡	戦国時代	遺物少数	防災無線アンテナ設置

(2) 歴史文化に関わる主な刊行物

基本構想策定にあたって確認した史料・文献は下記の通りである。

- ・『益子町史』第1巻～第6巻、別巻 益子町（1985～1991）
- ・『芳賀の文化財』第1集～第25集 芳賀郡市文化財保護審議会連絡協議会（1967～2015）
- ・『益子町の文化財』 益子町教育委員会（1999）
- ・『益子の文化財』 下野新聞社（1970）
- ・『益子地名考』 上中 野崎忠
- ・『ましこの民話「伝説とれきし」』 益子町郷土理解教育研究会（1997）
- ・『大羽史蹟抄』 大羽小学校PTA文化財部（1959）など集落ごとの郷土史 など

(3) 歴史文化基本構想のための調査

①益子の風土・風景を読み解くプロジェクト

「益子の風土・風景を読み解くプロジェクト」は、土祭 2015 開催に伴い行われたものである。町内を 13 地区に分けて、土祭風土形成ディレクター廣瀬俊介氏を中心に地域住民の協力を得ながら、平成 26 年（2014）10 月から平成 27 年（2015）6 月にかけて各地区を踏査、住民の方々への聞き取り、文献調査などを行った。1 回の踏査について平均 100 枚前後のスライドを作成、その報告内容を材料に地区住民と情報や意見を交換する「地区ごとの風土・風景を読み解くつどい」を、各地区の公民館等で開催した。

住民参加で益子の歴史と風土について調査や意見交換を行った当プロジェクトの成果は、基本構想の策定にあたっても貴重な資料となり得ることから、成果を位置づけることにした。

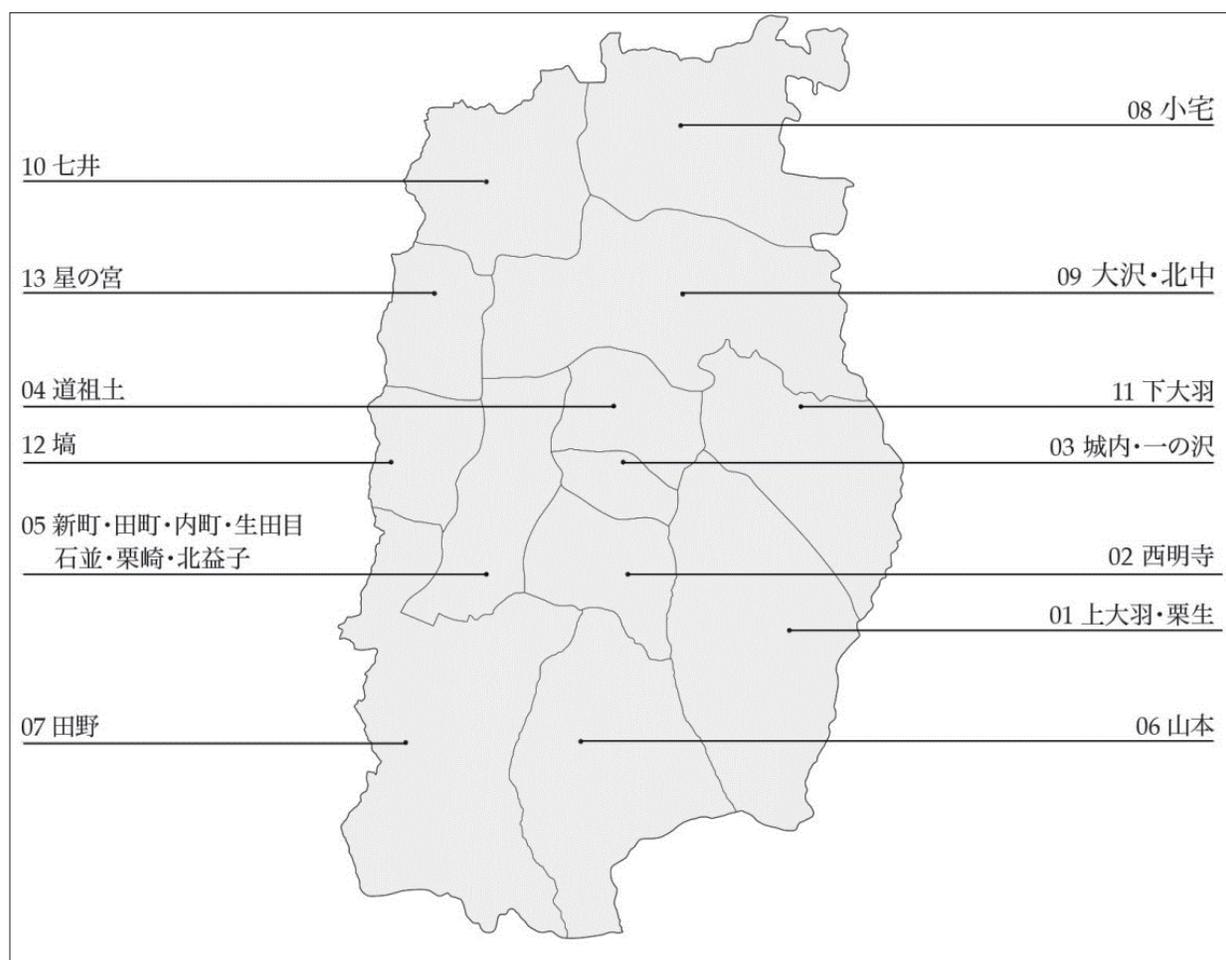


図 3-4 「益子の風土・風景を読み解くプロジェクト」の調査が行われた 13 地区

プロジェクトで住民の方々により語られた益子の歴史風土

《益子の土》

・焼き物の陶土だけではなく、マンガン、芦沼石（陶器の釉薬にも使用）等の資源を含む地層。高館山に金山が存在したという伝説、朱が取れたとも伝えられている。

《益子の森（里山）》

・昭和30年代までは薪が燃料の中心であり、落ち葉は畑の堆肥として利用された。雑木林で、赤松が多かった。松は火持ちが良く、焼き物を焼くのに向いていた。薪や陶土、焼き物等を運ぶのに必要な荷車を引くために馬を飼っている家も多くあり、馬のエサとなる草を刈りにいく森（里山）があった。

《益子の水》

・森（里山）から流れ出る水が山と平地の間に流れ（小川）をつくる。様々な生物が生息して、夏には蛍が見られた。山水は冷たいので、テビグロという人口の水路に水を引き込んで、水を温めた。益子の気候は栃木県内でも特殊で、雨が少なく、農業用水用に溜池が掘られた（江戸時代地図には既に存在）。

・藍染の日下田家の前に西明寺からの細流があり、洗濯ができるくらいきれいな川で、ギンギョ（ギバチ）等の小魚も多く見られた。

《益子の祭り》

・各地域にそれぞれの祭りがある。

・八坂神社御神酒頂戴式 ・祇園祭りの彫刻屋台

・芦沼の獅子舞 ・太々神楽（長堤・山本・綱神社）

・その他農作業と結びついた祭り ・山の神の祭り

《益子の生業》

・火山灰質の土壌で葉タバコの生産が盛んだった。たばこを干すペーハ小屋（たばこの乾燥小屋）では灯油が普及するまで、薪を燃やして乾燥していた。

・城内で見られた職種には、紺屋、鍛冶屋、籠屋、箆筒屋（木工/家具）、竹細工屋、唐傘屋などの他、馬の蹄鉄や荷鞍をつくった「荷鞍屋」もあった。

・昔の農家は皆農耕馬を飼っていた。農業のかたわら農耕馬に荷物を引かせる仕事（荷車屋）をしている人もいた。荷車屋は粘土や薪を運び、どの瀬戸屋も世話になった。

・焼き物に適した土（黄土）が採取できたため、北郷谷地区には水簸^{すいひ}での手作業の粘土作りを行う職人さんたちが多く軒を並べていた。

《土地の歴史（文化財）とのつながり》

・一の沢の東の大門口という場所から高館城の大門に至る坂道があった。

・日下田藍染交差点近くの自転車店のところの中堀は益子城の堀だと言われている。近所の窯場の所や、日下さんのところに土塁も残っている。

・星ノ宮神社の前を通り、鬼怒川を渡らずに奥州へ行ける道はたつ街道という古い街道である。

・亀岡八幡宮の氏子青年会と里山の会で小宅古墳群の周りに桜や菜の花を植えている。



写真 3-22 マンガン採掘跡



写真 3-23 水簸の場

②文化財悉皆調査

益子町の歴史文化の特性を把握するため、基本情報の収集として文化財の悉皆調査を実施している。おもに『益子町史』や『芳賀の文化財』など、既存の文献に掲載されている文化財（未指定含む）を一覧にまとめているほか、文化財の現在の有無・状態の変化・記載漏れ等、記載内容に変更点がないかを確認するために現地調査で補完している。現地調査は事務局のみで実施するものと「文化財探検隊」として住民参加型で実施するものがある。

「文化財探検隊」は少人数のグループを組み、事務局作成の文化財一覧と地図などの資料をもとに散策しながら文化財を確認していく調査である。見つけた文化財はカメラで写真に撮り、文化財マップを作成した。平成27年11月から文化財悉皆調査の一助として実施し、所在確認による文化財分布図の作成や、一覧未掲載の文化財把握につなげた。住民に普段見過ごしがちな身近な文化財に目を向けてもらうことで、住民自身が地域の歴史や文化に関心を持つきっかけとなった。

実施地域は、普門寺周辺（上山／11/13）、光明寺周辺（山本／12/12）、上大羽（12/19）、長堤八幡宮周辺（長堤／12/25）、御霊神社周辺（大沢／12/26）、七井市街地（1/16）、益子市街地（1/23）、東田井（2/20）、生田目（2/27）の9か所である。

実施後は事務局が地図をとりまとめ、参加者に配布するほか、実施報告をまとめて平成28年（2016）3月19日～4月17日に中央公民館1階ロビーで展示を行った。



写真 3-24 文化財探検隊実施の様子①



写真 3-25 文化財探検隊実施の様子②



写真 3-26 文化財探検隊実施の様子③



写真 3-27 文化財探検隊報告の展示

2-2 指定文化財

益子町の文化財の種別ごとの件数は以下の表の通りである。国指定の文化財はすべて重要文化財の建造物であり、西明寺、地蔵院、綱神社、円通寺等の寺社の建築で、室町時代のものである。県指定文化財は有形文化財の彫刻が多いが、これは、中世の仏像が主である。町指定文化財では建造物と天然記念物が多い。建造物は江戸時代の寺社建築が主となっている。天然記念物はすべて樹木である。

表 3-3 指定文化財の総数

種類	区分	国指定	県指定	町指定	小計
有形文化財	建造物	7	5	14	26
	絵画	0	2	6	8
	彫刻	0	11	1	12
	工芸品	0	1	2	3
	書跡	0	5	2	7
	考古資料	0	1	4	5
無形文化財	工芸技術	0	1	0	1
民俗文化財	有形	0	1	6	7
	無形	0	0	6	6
記念物	史跡	0	6	7	13
	天然記念物	0	3	16	19
総計		7	36	64	107

※平成 28 年 8 月 1 日現在

表 3-4 指定文化財リスト

No.	種別	名称等	員数	指定年月日	所在地等	所有者(管理者)	時代	備考
1	国指定 建造物	西明寺三重塔	1 基	S25. 8. 29	益子	西明寺	室町	
2	国指定 建造物	西明寺楼門	1 棟	S25. 8. 29	益子	西明寺	室町	
3	国指定 建造物	地蔵院本堂	1 棟	S25. 8. 29	上大羽	地蔵院	室町	
4	国指定 建造物	綱神社本殿	1 棟	S25. 8. 29	上大羽	綱神社	室町	建久 5 年 (1194) 創建
5	国指定 建造物	綱神社撰社大倉神社本殿	1 棟	S25. 8. 29	上大羽	綱神社	室町	大同 2 年 (807) 創建
6	国指定 建造物	円通寺表門	1 棟	S25. 8. 29	大沢	円通寺	室町	
7	国指定 建造物	西明寺本堂内厨子	1 基	S37. 6. 21	益子	西明寺	室町	
8	県指定 建造物	円通寺一切経塔	1 棟	S33. 4. 25	大沢	円通寺	江戸	応永 9 年 (1402) 創建
9	県指定 建造物	西明寺本堂	1 棟	S37. 1. 9	益子	西明寺	江戸	応永元年 (1394) 建立
10	県指定 建造物	西明寺鐘楼	1 棟	S50. 1. 28	益子	西明寺	江戸	
11	県指定 建造物	日下田邸 (染色工房併用)	1 棟	H8. 8. 20	城内坂	個人	江戸	
12	県指定 建造物	益子参考館上台 (旧濱田庄司邸離れ)	1 棟	H14. 8. 30	益子	個人	江戸	
13	県指定 絵画	絹本著色鮎図	1 幅	S48. 11. 27	長堤	個人	江戸	小泉斐作
14	県指定 絵画	絹本著色両界曼荼羅図	2 幅	H14. 2. 15	上大羽	地蔵院	室町	

No.	種別		名称等	員数	指定年月日	所在地等	所有者(管理者)	時代	備考
15	県指定	彫刻	銅造阿弥陀如来立像・両脇侍	3体	S35.10.11	大沢	円通寺	鎌倉	「大沢山」の陰刻あり
16	県指定	彫刻	銅造阿弥陀如来立像	1体	S35.10.11	山本	光明寺	鎌倉	
17	県指定	彫刻	木造如意輪観世音菩薩座像	1体	S44.4.25	益子	観音寺	鎌倉	
18	県指定	彫刻	木造閻魔王座像・両脇侍像	3体	S50.4.30	益子	西明寺	江戸	
19	県指定	彫刻	木造良栄上人像	1体	S52.2.15	大沢	円通寺	江戸	
20	県指定	彫刻	木造阿弥陀如来座像	1体	S52.2.15	大沢	円通寺	鎌倉	
21	県指定	彫刻	木造千手観音菩薩立像 附木札六枚	1体	H2.1.26	益子	西明寺	鎌倉	
22	県指定	彫刻	木造千手観音菩薩座像	1体	H2.1.26	益子	西明寺	鎌倉	
23	県指定	彫刻	木造阿弥陀三尊像	3体	H2.1.26	上大羽	地藏院	鎌倉	阿弥陀像は室町作、寛永10年(1633)修理
24	県指定	彫刻	木造阿弥陀三尊像	3体	H2.1.26	上大羽	地藏院	平安	伝尾羽寺本尊
25	県指定	彫刻	西明寺本堂厨子内仏像群	8体	H4.2.28	益子	西明寺	鎌倉	如意輪観音菩薩像は室町作
26	県指定	工芸品	梵鐘	1口	S50.4.30	益子	西明寺	江戸	
27	県指定	書跡	正親町天皇綸旨	1通	S52.2.15	大沢	円通寺	室町	
28	県指定	書跡	聖鬘贊	15冊	S52.2.15	大沢	円通寺	江戸	
29	県指定	書跡	浄土総系図	2巻	S52.2.15	大沢	円通寺	江戸	
30	県指定	書跡	月形函文書	70冊	S52.2.15	大沢	円通寺		
31	県指定	書跡	浄土鎮西義名越派代々印 璽脈譜	3巻	S52.2.15	大沢	円通寺	室町	
32	県指定	考古資料	瓶子	1口	S35.10.11	益子	西明寺	鎌倉	
33	県指定	無形	草木染		H17.8.16	城内坂	個人	江戸	
34	県指定	有形民俗	藍染め甕場		H8.8.20	城内坂	個人	江戸	
35	県指定	史跡	風戸塚古墳	1基	S29.9.7	北中	個人	古墳	
36	県指定	史跡	入定塚古墳	1基	S33.8.27	大沢	円通寺	古墳	
37	県指定	史跡	小宅古墳群	18基	S34.11.27	小宅	亀岡八幡宮	古墳	
38	県指定	史跡	宇都宮家の墓所		S42.1.20	上大羽	益子町	室町	
39	県指定	史跡	西明寺境内		S50.4.30	益子	西明寺	室町	
40	県指定	史跡	浅間塚古墳	1基	H28.3.4	埴	栃木県	古墳	
41	県指定	天然記念物	こうやまき	1本	S29.9.7	益子	西明寺	鎌倉	
42	県指定	天然記念物	西明寺の椎林叢	18本	S30.7.26	益子	西明寺		
43	県指定	天然記念物	枝垂えごのき	1本	S34.11.27	山本	光明寺		
44	町指定	建造物	西明寺閻魔堂	1棟	S48.2.7	益子	西明寺	江戸	
45	町指定	建造物	長堤八幡宮本殿	1棟	S48.2.7	長堤	長堤八幡宮	江戸	康平6年(1063)創建
46	町指定	建造物	地藏院観音堂	1棟	S48.2.7	上大羽	地藏院	室町	昭和58年(1983)修理
47	町指定	建造物	光明寺薬師堂	1棟	S48.2.7	山本	光明寺	江戸	
48	町指定	建造物	安善寺本堂	1棟	S56.12.15	大平	安善寺	江戸	建久5年(1194)創建
49	町指定	建造物	鶏足寺山門	1棟	H1.5.15	益子	鶏足寺	江戸	
50	町指定	建造物	旧濱田庄司の母屋	1棟	H1.6.12	益子	益子町	江戸	
51	町指定	有形民俗	内町彫刻屋台	1台	H1.9.1	益子	内町自治会	江戸	明治14年(1881)購入
52	町指定	有形民俗	新町彫刻屋台	1台	H1.9.1	益子	新町自治会	江戸	明治13年(1880)購入
53	町指定	有形民俗	田町彫刻屋台	1台	H1.9.1	益子	田町自治会	江戸	明治15年(1882)購入
54	町指定	有形民俗	松本屋台	1台	H2.9.4	山本	松本自治会	江戸	京都で製作
55	町指定	有形民俗	原彫刻屋台	1台	H2.9.4	山本	原自治会	江戸	明治43年(1910)彩色
56	町指定	有形民俗	上棟柱立飾山車	1台	H26.2.26	七井	下町後町自治会		
57	町指定	建造物	日枝神社本殿	1棟	H4.1.23	七井	日枝神社	江戸	神護景雲2年(768)創立
58	町指定	建造物	西明寺大師堂	1棟	H4.5.8	益子	西明寺	江戸	
59	町指定	建造物	益子参考館内登り窯	1基	H5.11.5	益子	益子参考館	昭和	濱田庄司築窯
60	町指定	建造物	妙伝寺山門	1棟	H10.7.1	山本	妙伝寺	明治	
61	町指定	建造物	益子参考館細工場	1棟	H15.3.20	益子	益子参考館	明治	
62	町指定	建造物	岩下製陶(太平窯)登窯	2基	H19.7.18	益子他	個人	明治	

No.	種別	名称等	員数	指定年月日	所在地等	所有者(管理者)	時代	備考	
63	町指定	建造物	山本八幡宮	1棟	H28.7.26	山本	山本神社氏子		
64	町指定	絵画	歌舞伎舞台背景襖絵	48枚	S48.2.7	山本	松本自治会	江戸	
65	町指定	絵画	元禄絵地図	1面	S48.2.7	益子	個人	江戸	
66	町指定	絵画	文化絵地図	1面	S48.2.7	益子	個人	江戸	
67	町指定	絵画	天保絵地図(長堤村地図)	1面	S48.2.7	長堤	個人	江戸	
68	町指定	絵画	真言八祖絵図	8幅	S60.6.4	東田井	東田井自治会	室町	室町末～江戸初期
69	町指定	絵画	襖絵	8枚	H10.7.1	山本	妙伝寺	江戸	
70	町指定	彫刻	木造阿弥陀如来像	1体	S48.2.7	前沢	長谷寺	鎌倉	
71	町指定	工芸品	濱田庄司作品	5点	H5.3.11	益子	益子参考館	昭和	
72	町指定	工芸品	島岡達三作品	5点	H22.2.24	益子	益子町ほか	昭和	
73	町指定	書跡	宋版大般若経	452巻	S48.2.7	上大羽	地蔵院	江戸	
74	町指定	書跡	小宅家文書	9通	S48.2.7	小宅	個人	室町	
75	町指定	考古資料	板碑	1基	S48.2.7	大平	安善寺	室町	
76	町指定	考古資料	五輪塔及び瓶子	1基1口	S48.2.7	上山	普門寺	鎌倉	
77	町指定	考古資料	羽石家五輪塔	6基	S48.2.7	前沢	長谷寺	鎌倉	
78	町指定	考古資料	大郷戸廃寺跡五輪塔群		S48.2.7	大郷戸	益子町	鎌倉	
79	町指定	無形民俗	芦沼獅子舞		S49.3.28	芦沼	芦沼獅子舞保存会	江戸	
80	町指定	無形民俗	八坂神社御神酒頂戴式		S60.2.15	益子	大字益子	江戸	
81	町指定	無形民俗	山本太々神楽		H19.6.26	山本	山本鹿島神社氏子	明治	
82	町指定	無形民俗	長堤太々神楽		H19.6.26	長堤	長堤八幡神社宮比講	明治	
83	町指定	無形民俗	綱神社太々神楽		H19.6.26	上大羽	綱神社太々神楽保存会	明治	
84	町指定	無形民俗	妙伝寺の雅楽		H19.6.26	山本	妙伝寺	明治	
85	町指定	史跡	古代窯跡		S48.2.7	上大羽	個人	古代	
86	町指定	史跡	天王塚古墳	1基	S48.2.7	益子	個人	古墳	
87	町指定	史跡	高館城跡		S48.2.7	益子	益子町	室町	
88	町指定	史跡	藤根善治の墓	1基	S48.2.7	益子	正宗寺	江戸	
89	町指定	史跡	安善寺境内		S52.7.18	大平	安善寺		
90	町指定	史跡	本沼窯業群跡		S52.7.18	本沼	個人ほか	古代	
91	町指定	史跡	御城山遺跡		H3.6.11	益子	益子町	室町	
92	町指定	天然記念物	椎	1本	S48.2.7	上大羽	綱神社	鎌倉	
93	町指定	天然記念物	クスノキ	1本	S52.7.18	益子	西明寺		
94	町指定	天然記念物	リンボク群生地帯	群生地	S52.7.18	益子	西明寺		
95	町指定	天然記念物	菩提樹	1本	S52.7.18	上大羽	地蔵院	室町	
96	町指定	天然記念物	金木犀	1本	S52.7.18	山本	光明寺	江戸	
97	町指定	天然記念物	梅	1本	S52.7.18	山本	光明寺	江戸	
98	町指定	天然記念物	シダレ桜	1本	S52.7.18	山本	光明寺	江戸	
99	町指定	天然記念物	シダレ桜	1本	S52.7.18	大平	安善寺		
100	町指定	天然記念物	カヤ	1本	S52.7.18	大平	安善寺		
101	町指定	天然記念物	ヒイラギ	1本	S52.7.18	大平	安善寺		
102	町指定	天然記念物	タラヨウ	1本	S57.10.1	長堤	個人	江戸	
103	町指定	天然記念物	梅	1本	S57.10.1	長堤	個人	江戸	
104	町指定	天然記念物	ムベ	1本	S57.10.1	益子	西明寺		
105	町指定	天然記念物	シカクダケ	群生地	S57.10.1	益子	西明寺		
106	町指定	天然記念物	糸絵葉	1本	S60.2.15	上大羽	地蔵院	室町	
107	町指定	天然記念物	赤松	2本	H9.9.1	小宅	益子町	大正	

(1) 国指定文化財



写真 3-28 西明寺三重塔



写真 3-29 西明寺楼門



写真 3-30 地藏院本堂



写真 3-31 網神社本殿



写真 3-32 網神社摂社大倉神社本殿



写真 3-33 円通寺表門



写真 3-34 西明寺本堂内厨子

(2) 県指定文化財



写真 3-35 円通寺一切経塔



写真 3-36 西明寺本堂



写真 3-37 西明寺鐘楼



写真 3-38 日下田邸（染色工房併用）



写真 3-39 益子参考館上台（旧濱田庄司邸離れ）



写真 3-40 絹本着色鮎図

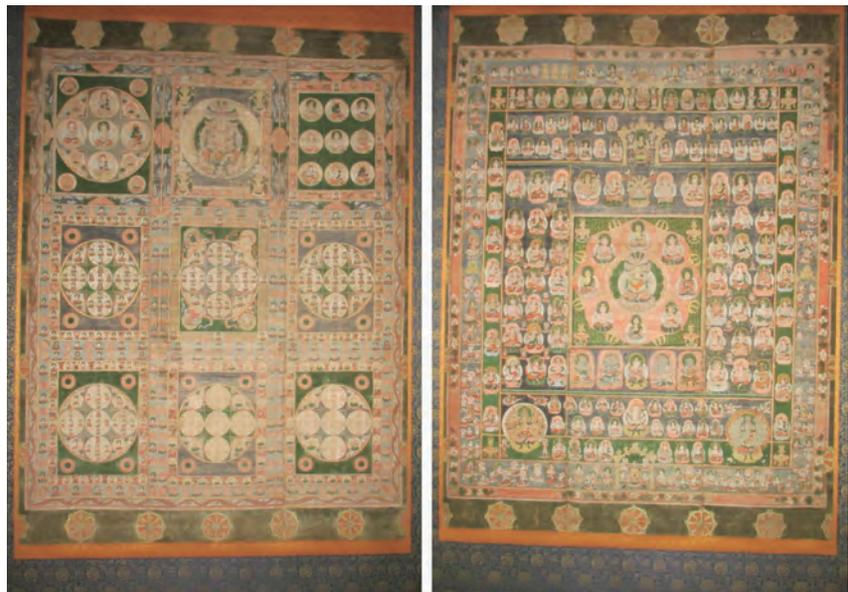


写真 3-41 絹本着色両界曼荼羅図



写真 3-42 銅造阿弥陀如来立像・両脇侍



写真 3-43 銅造阿弥陀如来立像

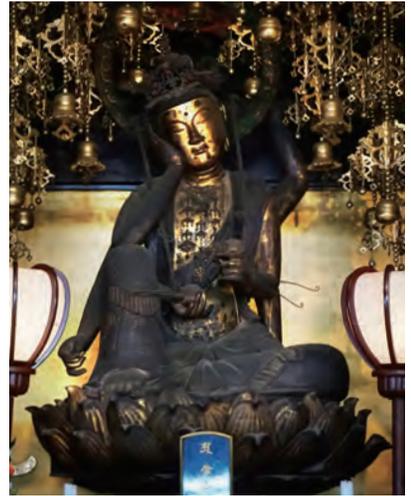


写真 3-44 木造如意輪観世音菩薩座像



写真 3-45 木造閻魔王座像・両脇侍像



写真 3-46 木造良栄上人像



写真 3-47 木造阿弥陀如来座像



写真 3-48 木造千手観音菩薩立像附木札六枚



写真 3-49 木造千手観音菩薩座像



写真 3-50 木造阿弥陀三尊像（鎌倉）



写真 3-51 木造阿弥陀三尊像（平安）



写真 3-52 西明寺本堂厨子内仏像群



写真 3-53 梵鐘

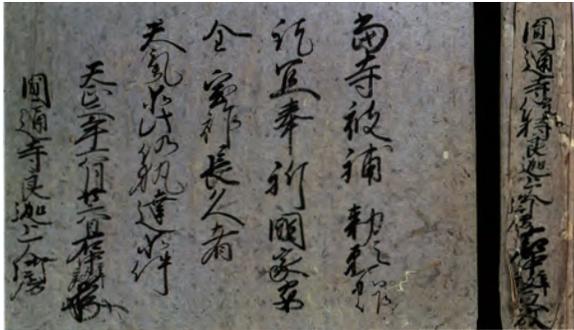


写真 3-54 正親町天皇綸旨



写真 3-55 聖闡贊



写真 3-56 浄土総系図



写真 3-57 月形函文書



写真 3-58 浄土鎮西義名越派代々印璽脈譜



写真 3-59 瓶子



写真 3-60 草木染



写真 3-61 藍染め甕場



写真 3-62 風戸塚古墳



写真 3-63 入定塚古墳



写真 3-64 小宅古墳群



写真 3-65 宇都宮家の墓所



写真 3-66 西明寺境内



写真 3-67 浅間塚古墳



写真 3-68 こうやまき



写真 3-69 西明寺の椎林叢



写真 3-70 枝垂えごのき

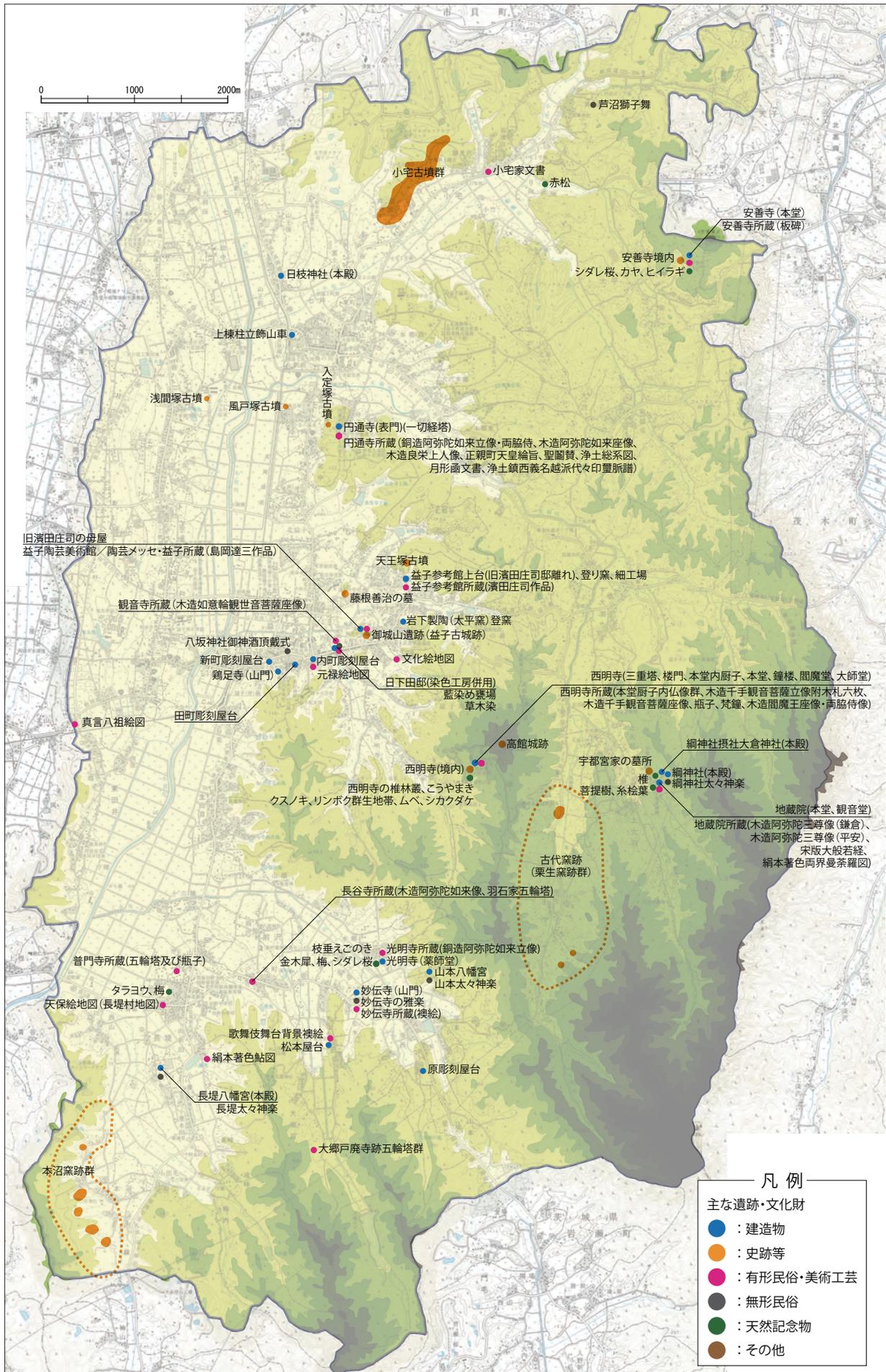


図 3-5 指定文化財の分布図

2-3 未指定文化財

未指定文化財については、悉皆調査で『益子町史』や『芳賀の文化財』で挙げられているものをリスト化して、可能な限りその所在等について調査を行った。調査は現在も継続中である。その結果、994件にもものぼる文化財がリスト化された。リストは巻末資料に掲載した。

益子には古墳群や奈良・平安時代の窯跡群、中世の城館跡や旧地蔵院跡、西明寺跡等、貴重な遺跡が数多く存在するが、これらのほとんどが未調査かまたは一部の限られた範囲しか発掘調査が行われていない状況である。

表 3-5 未指定文化財の総数

種類	区分	未指定
有形文化財	建造物	139
	絵画	41
	彫刻	49
	工芸品	0
	書跡	116
	考古資料	26
無形文化財	工芸技術	0
民俗文化財	有形	238
	無形	152
記念物	史跡	228
	天然記念物	5
総計		994

※平成 28 年 10 月 1 日現在



写真 3-71 石塔群



写真 3-72 二十三夜塔



写真 3-73 山本八幡宮摂社鹿島神社



写真 3-74 御霊神社社叢



写真 3-75 建造物



写真 3-76 半鐘

2-4 地域ごとの文化財の状況

文化財探検隊で調査した9か所について、その概要と確認した文化財について紹介する。

(1) 普門寺周辺（大字上山）

【地域の概要】

上山は旧田野村に属し、北側は旧益子町の生田目と接し西端に小貝川が流れる。小貝川にそそいでいるぐみ川が東から西に流れており、普門寺を中心とした地域と田野中学校南部に飛び地が存在する。夏になると休耕田を利用して上山営農組合によるひまわり祭りが開催され、県内外から多くの観光客が訪れる。

【確認した主な文化財について】

字老戸の石塔群には天明6年（1786）の二十三夜供養塔をはじめ8基の石塔が一か所に集められている。馬頭観音2基、対露従軍馬匹記念碑1基、生馬大神1基と馬に関する石塔が目立つ。天保絵地図（町指定文化財）に記されている田野御陣屋の北側の道「御前曲輪宿通」は現在も色濃くその様子をとどめており、その道沿いにはお堂や道標が残っている。普門寺境内には多くの石塔が集められているほか、境内墓地にある侠客梅五郎碑は石材に田野八幡原古墳群の天井石が用いられている。



図3-6 天保絵地図（上）と現在の地図（下）
長堤村の絵図である天保絵地図の白抜き部分は、上山村の土地を表しており、現在の区域と一致する。

(2) 長堤八幡宮周辺（大字長堤）

【地域の概要】

上山の南に位置し、西端を流れる小貝川にかかる田野橋が真岡市からの玄関口となっている。全体的に平坦な土地柄ではあるが緩やかな台地が南部へ伸びており、低い土地に水田、台地には畑が広がる。田野城跡や長堤八幡宮などが残り、現在も学校や郵便局などがおかれるなど古くから田野地域の中心地となっている。長堤八幡宮の10月の例大祭では長堤太々神楽（町指定文化財）の奉納が行われる。平成28年（2016）10月には道の駅ましこが開業した。

【確認した主な文化財について】

県道41号線長堤交差点から西側に一本入った道が昔の本通りである。その街道に面した字南廓に虚空蔵堂や石塔群が建てられている。石橋料寄附之碑は、明和5年（1768）に長堤の添谷氏と妻の実家（茨城県桜川市大泉）の袖山氏が、江戸の千住から長堤村までの橋が壊れているのを憂い、石橋料を寄付したことに對しての顕彰碑である。天保絵地図に描かれた街道は現代のものと同様の部分が多い。南端の田野地区小泉との境にたたずむ十九夜供養塔は道標を兼ねている。その他にも表宿や東曲輪など田野城に関係していると思われる地名が多く残されている。



写真3-77 石橋料寄附之碑

(3) 光明寺周辺（大字山本）

【地域の概要】

光明寺のある山本地区は、益子町の南東部、高館山の南側、茨城県との県境にあり、小貝川に合流するぐみ川の源流を持つ。河川の流域には水田が広がっており農業を生業の中心とし、十数年前までタバコの栽培も盛んであった。江戸時代に越後国からの入百姓があった歴史を持つこの地区には、現在でも多くの祭りや民俗芸能が残り、松本歌舞伎舞台襖絵、妙伝寺雅楽、山本太々神楽（いずれも町指定文化財）、お囃子などが地域の人々によって受け継がれている。

【確認した主な文化財について】

阿弥陀如来像（県指定文化財）、薬師堂（町指定文化財）、シダレ桜（町指定文化財）など数多くの指定文化財を有している光明寺には、その他にも十九夜塔や二十三夜塔など信仰にかかわる周辺の石塔が集められている。山本八幡宮（町指定文化財）は山本太々神楽の舞台として地元の方に親しまれており、拝殿の天井には色鮮やかなさまざまな植物が描かれ美術的にも注目される。



写真 3-78 山本八幡宮拝殿天井

(4) 東田井地区

【地域の概要】

東田井は益子町の西部に位置し、東に小貝川、西に独立丘陵である根本山を配した南北に長い地域である。古墳群や集落跡などの遺跡があり、江戸時代には幕府領（真岡代官領）であった。町指定文化財には中世末期から近世初期に描かれたとされる真言八祖絵図がある。東田井のお囃子は益子祇園祭で新町に伝授されるなど他地域との文化的交流がある。

【確認した主な文化財について】

東田井を南北に伸びる街道をタツ街道という。真岡市との境に建つ観音堂から、東田井に入る山裾の道には、数多くの石塔や神社などが残されている。東田井町営住宅南のY字路には二十三夜供養塔兼道標があり、「左くげたつくば道／右さいみゃうじきつれがわ道」と刻まれている。喜連川には宿場がありその先で奥州街道につながった。江戸時代に流行した百観音を巡る観音信仰は、各地にミニ霊場をつくり、芳賀郡内にも芳賀百観音が設けられた。東田井の千手観音は芳賀西国16番にあたる。



写真 3-79 二十三夜塔兼道標

(5) 生田目地区

【地域の概要】

生田目は、生田目城跡を背後に擁して高龕神社を中心に置き、小貝川低地をゆるやかに見下ろす地域である。車堂遺跡の住居跡に代表されるように縄文時代から人が住んでいることが明らかになっている。江戸時代には生田目村として益子村・上大羽村などとともに黒羽藩の飛び地（下の庄）として支配されていた。ながく農業用水に悩まされており、小貝川から水を引く際にしばしば東田井との間に水争いが起きていたことがわかっている。現在は秋になると休耕田を利用してコスモス祭りが開催され、県内外から多くの観光客が訪れる。

【確認した主な文化財について】

共同墓地内の釈迦堂に昔の霊柩車がおさめられていた。大小1つずつあり、大人用と子ども用とことりひょうという。また、霊柩車を運ぶための役割分担表である床取表も同じ釈迦堂内に納められており、たいへん貴重である。生田目城跡内には昔、しょうそうじ正覚寺という寺院があり、本尊は芳賀百観音の芳賀坂東3番となっている。益子小学校初代校長の木村時習は、益子小の前身となる私立日新館をこの寺に建て小学校教育に尽力した。『ましこの民話伝説とれきし』には生田目を舞台とした物語が多く集録されており、物語に登場する地藏様や薬師堂が残されている。文化4年(1807)の道標には「右ハさくハミち(作場道) / 左ハ日光のぶほしのみや道(日光・延生・星の宮)」と記されている。



写真 3-80 昔の霊柩車

(6) 益子本通り(大字益子)

【地域の概要】

益子町のほぼ中央部、真岡鐵道益子駅のあるこの地区は、駅前より東へ緩やかに登る地形であり、東西に通る本通り沿いには、古くからの商店が立ち並ぶ。毎年7月には鹿島神社周辺を中心に祇園祭が催され、御神酒頂戴式(町指定文化財)が行われるほか、彫刻屋台(町指定文化財)が引き回される。近世は鬼怒川の舟運、近代以降は真岡鐵道による鉄道輸送にかかわる物資集散地のように機能したと思われる。窯業について、城内から道祖土にかけて作陶場が集中し、販売店は仲買店を含めて新町、田町に集中しており、地区ごと機能が分担されていたことがわかる。

【確認した主な文化財について】

元禄絵地図(町指定文化財)に記された街道は、現代の道と重なる部分が多く、当時のようすをうかがうことができる。近代に入ってから商店街のようすも残っており、近代和風建築を多く見ることができる。新町南側石塔群は、戦後になってから地元の人たちによって現在の場所に集められた。もとの位置を把握している人が健在なため、今後聞き取りを行うなどの記録が必要である。鹿島神社の境内には古い鳥居が埋められていることや、征清記念碑には古墳の天井石が使われているなどの話を地元の歴史に明るい方々からうかがうことができた。



写真 3-81 征清記念碑

(7) 上大羽地区

【地域の概要】

上大羽は高館山の東側に位置し、低山登山で人気の雨巻山・三登谷山などが連なる山々の麓、大羽川、栗生川に沿って南北に細長く開けた土地である。平安時代末期から室町時代にかけて活躍した宇都宮氏ゆかりの土地であり、地蔵院・綱神社・大倉神社など国指定文化財が残るほか、綱神社では綱神社太々神楽（町指定文化財）が行われる。

【確認した主な文化財について】

大羽小学校 PTA 文化部により昭和 34 年（1959）に発行された『大羽史蹟抄』に「大羽史蹟要覧」という地図が付属され、そこに記された石塔や建造物、天然記念物などが現在も多く残されている。益子焼の祖である大塚啓三郎に焼き物の技術を指導した田中長平が黒子道之祐とともに大羽に御嶽社を開いたことを記念した碑が建てられている。この地区でみられた藁宝殿は形状が茨城県のもの類似していることから文化圏のつながりがうかがえる。

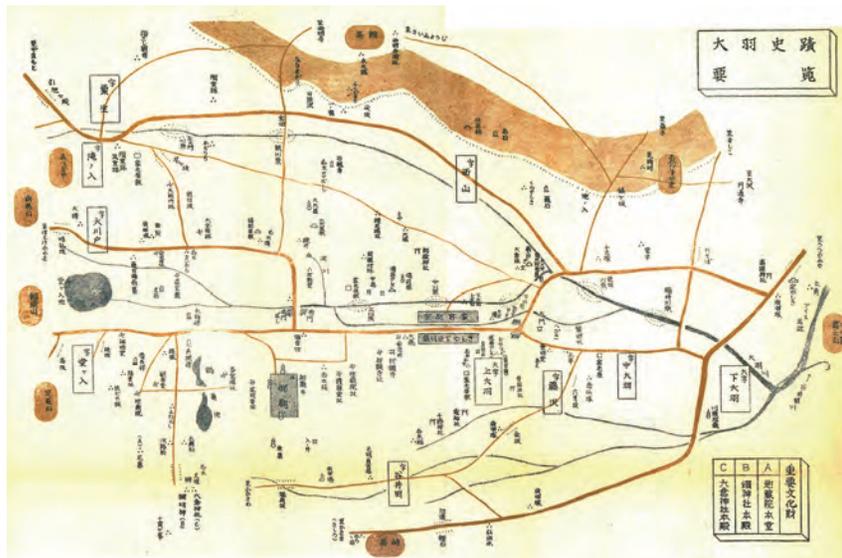


図 3-7 大羽史蹟要覧

(8) 七井地区

【地域の概要】

益子町の北西部、隣町の市貝町との町境にあり、町を南北に縦断する小貝川がこの地区のほぼ中央を流れ、川に並行して真岡鐵道が走る。七井駅の東側が中心部で、小宅川・大羽川・小貝川に三方を囲まれた台地には七井城が造られた。益子勝宗が矢島城主七井綱代を破り 5 男勝忠を七井城主としたことが始まりとされ、益子氏ゆかりの城館といえる。宿場町として賑わいその後も商店街が形成され映画館や旅館もあった。この地区には、水の染み出る場所が数多くあり、七井という地名の由来と言われている。町指定文化財の上棟柱立飾山車は地元の夏祭りで引き回されるが、地元の人々によって近年になり復活したものである。

【確認した主な文化財について】

七井城は土塁が残り各所で確認できるほか、今回の調査で削平された場所も確認できた。旧七井村役場跡には住宅が建てられているが、入口に植えられた松だけが当時の面影を残している。たいへん幅が狭い古い道があり、現在はあまり使われていないように見受けられたが、地元の方によれば以前は神輿を担いでこの道を通ったそうで、地域に根付いた道であるといえる。

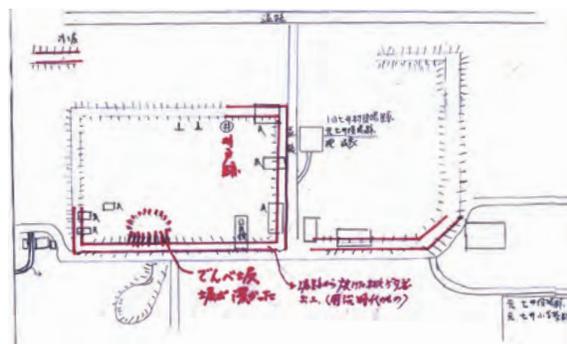


図 3-8 手書きの七井城跡の図

参加者の自主的な古老への聞き取りでわかった土塁の跡がピンク色で記されている。

(9) 御霊神社周辺（大字大沢）

【地域の概要】

大沢地区は、主に北郷谷丘陵の北部に位置し、一部新福寺が雨巻山地に含まれ、東の船橋川、西の大羽川がそれぞれ南東から北西に流れる。集落は丘の麓に形成された台地上にほぼ集まり、縄文時代の御霊前遺跡、古墳時代の御霊神社古墳群などの数多くの遺跡が分布する。御霊神社の創建は社伝に「景行天皇の御世」と書かれる。

【確認した主な文化財について】

この地区を通る水戸北街道は、全長 60 km で、栃木県の中心部と、茨城県の中心部を結ぶ重要な道であった。益子では現在の県道 1 号線と重なる部分が多く、下大羽から七井に向かうとき大沢では大羽川の右岸を並行するように通っている。しかし御霊前遺跡付近になると遺跡を避けるように御霊橋を渡り大羽川左岸を通っている。字上町の Y 字路で再び大羽川を渡り県道 1 号線に戻るがこの Y 字路に石塔群があり目印となっている。また、主要な道のひとつに益子から大沢への道がある。現在の町民センターと益子中学校の間の道をとおり、大沢に入ると水戸北街道に接続する。接続した交差点には石塔群がありこちらも目印となっている。



写真 3-82 石塔群

3. 歴史文化保存・活用の課題

3-1 保存・活用の現状と課題

益子町における文化財の保存・活用は第2章2-3に挙げている通りである。文化財を常設展示する施設がなく、埋蔵文化財を含めた文化財を保存・管理し活用を推進していくための文化財担当の専門職員（正規）が不在であるなど体制面での課題がある。また、国指定文化財個別の保存・活用計画を整える必要があり、文化財の画像撮影・デジタル化による記録が求められる。その他、町内外への周知を充実させる必要であり、有形文化財の公開や新ましこ未来計画に沿った観光、環境、建設等、関連部局との連携が求められる。

3-2 調査研究の現状と課題

調査については益子町史編纂や芳賀郡内の4町（芳賀町・市貝町・茂木町・益子町）と真岡市で作成している『芳賀の文化財』の発行に伴うものなど、第2章2-3、第3章2-1で述べたとおりである。益子町には多くの文化財があるため、調査研究を行いその価値について把握することで、未来へ継承し今後のまちづくりに活かすための基礎資料とする必要があるといえる。基本構想の策定にあたり文献調査や文化財探検隊等で現地確認調査を実施したが、今後も悉皆調査を継続するほか、町で把握している225件の埋蔵文化財包蔵地のうち、そのほとんどが未発掘であるため、学術調査の実施等を検討する必要がある。また調査を実施しそれらをまとめ益子町の歴史文化を研究する専門職員の配置や専門家・専門機関との連携が求められる。

3-3 体制上の現状と課題

町の体制については第2章2-1で述べたとおりである。地域と連携して小宅、大羽、山本のよ様な地元主導の取組みへの助言・支援を行い、文化財所有者の意識向上に向けた助言・支援も行っている。今後は文化財パトロールや防災・防犯設備の充実を図るとともに、行政、地域、所有者の円滑な連携が求められる。